

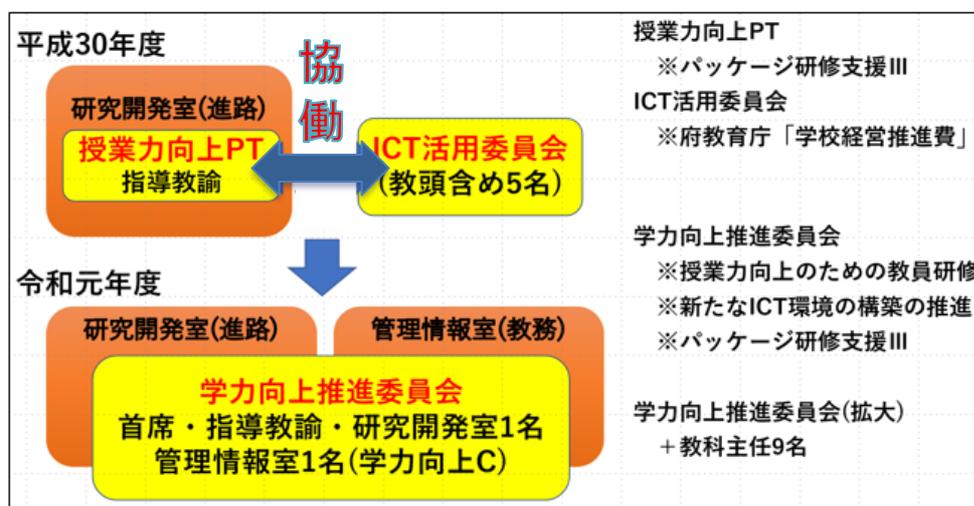
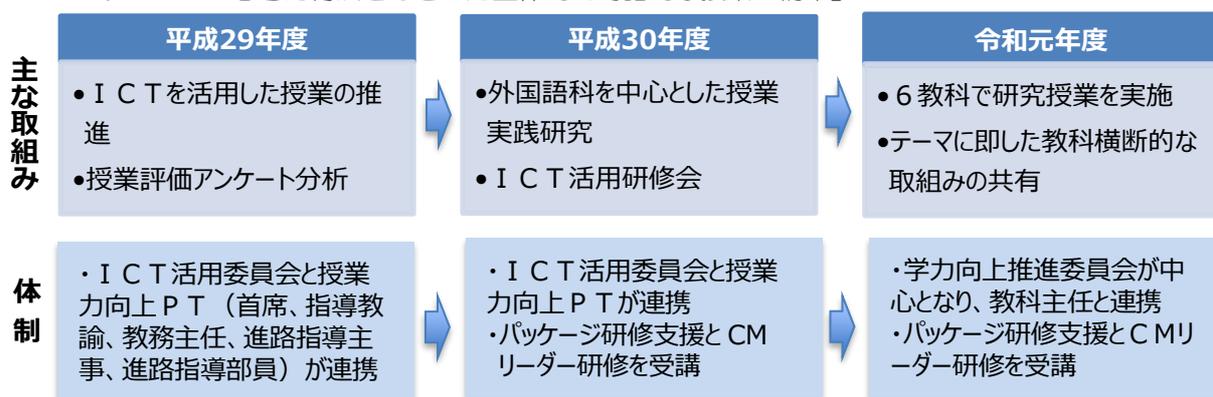
## 府立寝屋川高等学校の取組み

### (1) 学校教育目標(めざす生徒像)

- 高い教養と豊かな感性を備えた次代のリーダー
- 未来を切り拓くタフでアクティブな人材
- 次代を担う個性豊かな人材

### (2) 主な取組みと組織体制の準備

- テーマ…「思考力育成をめざした主体的で対話的な授業の構築」



平成 30～令和元年度 組織体制

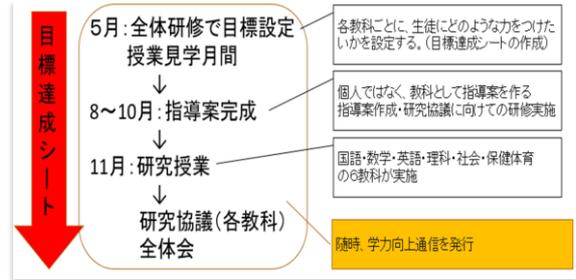
### (3) 主な実践とその工夫

#### ① 教科横断で取り組めるテーマを設定する

寝屋川高校では、豊富な知識を効率よくインプットする授業が主流である一方で、生徒が主体的に課題解決に取り組む場面が決して多くない状況がありました。そのため、生徒の自己表現力や論理的思考力に課題が見受けられました。そうした現状を打破すべく、3年前より「思考力を鍛える授業」をテーマに設定し、平成30年度よりパッケージ研修支援を受け、さらにその取組みを促進しました。生徒の学びを深めるためには、深い学びを意識した授業が特定の教科だけの取組みではなく、全ての教科において行われることが重要です。寝屋川高校では、「思考力育成をめざした主体的で対話的な授業の構築」を教科横断的なテーマとして設定することで、学校全体として取り組む方向性が共有されました。

## ② 年間を通じた研修計画～周到な準備～

組織的な授業改善は、学校全体の共通理解があるほどにその促進に向けたスピードは増します。研修主体者は、学校教育目標を踏まえて平成 30 年度にまとめた「各教科の身に付けさせたい力」を基に、令和元年5月に全体研修を行い、各教科で学力向上目標達成シートを作成しました。



令和元年度の取組み

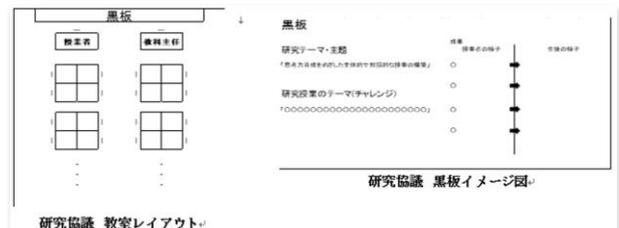
またそのシートを基に行う 11 月の研究授業に向けて、8月に「付けたい力に即した授業設計(指導案作成)を考える勉強会」、10月に「よりよい研究協議に向けた校内研修」を行いました。その際には、研究授業担当者と教科主任も同席し、各教科の研究授業における目標設定とその評価方法の設定等について個人での取組みではなく、教科として明確なイメージをもつことができました。また、研究協議を学校全体の授業改善に活かすために、「生徒の学びに着目した振り返り」を行うことが重要であることについて理解を深めました。こうした研究授業、研究協議に先立った研修の実施により、教員全員が改めて取組みの目的を共通認識し、11月の研究授業当日を迎えることができました。

## ③ 教員全員が研究授業・研究協議に参加するために

研究授業を行う際、当該学年(1年)以外の学年は午前中で原則下校としたことで、多くの教員が参加できる環境を整えました。また6教科(国、地歴、数、理、保体、外)が研究授業を実施することで、幅広い教科で教科横断的な取組みを共有することができました。各教科別に分かれて実施した研究協議では、教室のレイアウトや協議のまとめ方等について事前に共有していたことで、スムーズに「生徒の学びに着目した振り返り」が行われました。それを再度、全体の場でも共有を行うことで、「なぜ?という問いかけが大事」、「生徒の考えが生まれるのを待つ時間が大切」、「フォーマットを提示することで生徒が見通しを持つことができる」といった教科横断的な授業改善につながる重要な要素が浮かび上がりました。

(I) 授業者より(5分)	本日の研究授業についての感想、補足説明等
(II) グループ協議(20分)	グループ(1グループ4名)で授業の様子について情報共有 ワークシートに観察記録の書き出し、成果(良かったところ)の整理 教科主任・授業者は適宜、グループの議論に参加
(III) 発表・共有(15分)	成果(良かったところ)の発表・集約 教科主任は黒板に意見等を記録
(IV) まとめ(5分)	教科主任が全体の意見をふまえ、今後の授業の方向性(今後活かせるもの)を示す 教科主任は、全体会の場で発表

研究協議の流れ



研究協議のレイアウト、黒板イメージ図

寝屋川高校では、こうした一連の取組みにより、平成 29、30 年度から行われていた ICT 機器の活用した授業づくりについての取組みが明確な目的意識のもと行われ、教員同士が学び合う姿が多く見られるようになりました。個人にとどまらない、教科の、ひいては学校全体の授業改善につながるヒントを得ることができ、組織としてビジョンを共有しながら、授業改善に向けて日常的に議論を重ねていく文化の醸成がなされつつあります。